

## 食に関するリスク知覚と共感の脳科学的 経済学研究<sup>\*)</sup>

中 込 正 樹

### 目次

1. 序
2. 実験装置と実験タスクについて
3. 実験結果について
4. 得られた結果の含意について

### 1. 序

人々の健康と安全に対する意識が高まっているが、他方で経済社会の複雑化の中で、われわれの生命を維持するための最も基本的な条件である食の安全に対する信頼が大きく揺らいでいる。この問題に対してはすでに学問的関心も高く、実証的な調査や研究、さらにそれに基づく理論研究が数多く行われている。しかし本論文では以下で述べるように、新しい視点から、1つの実験研究を行いたいと考えている。それは、分析の焦点をむしろわれわれ自身に向けて、こうした食の安全性に対する不信・不安状態におかれた人間は、どのような脳科学的あるいは脳神経的反応を示すのか、この問題をニューロエコノミックスの実験によって明らかにしていこうとするものである。特に社会の中で、その文脈的变化を認識するいわゆる「社会脳」の視点を強調しながら、実験研究を進

\*) 本論文は、日本学術振興会・科学研究費・基盤研究Cおよび青山学院大学・総合研究所・研究プロジェクト(社会科学部門)による研究成果の一部を含むものである。また今回の実験の実施についても、青山学院大学大学院経済学研究科・博士課程の藤森裕美氏、牧和生氏、植草由起子氏からの協力を得た。いつもながらの楽しい実験チームのサポートで、本研究は進められた。心より感謝の意を表したい。

めていきたいと考えている。

さて具体的にこの問題に関して考察を始める前に、準備として、これまでの不確実性知覚に関する議論を整理しておくことにする。ここで不確実性知覚と呼んでいるものは、内容についてみると、大きく2つに分けることができる。リスク知覚と曖昧性知覚である<sup>1)</sup>。この区別は、よく知られているようにF.H. Knight (1921) によるリスクと真の不確実性の区分法に基づいている。リスク知覚とは、その主体が、自分の直面している不確実な事象の確率分布に関して、それに関する知識を持っている（少なくとも主観的に持っていると感じている）ときの不確実性知覚のことである。これに対して、真の不確実性知覚（または曖昧性知覚）とは、そうした知識を持っていない（主観的にもそうした知識を持っていないと感じている）ときの不確実性知覚のことである。こうした概念的区別を明確にして、以下の議論を展開していきたい。さらに近年、これら2種類の不確実性知覚が、人間の脳にどのような異なる影響を及ぼすのか、ニューロエコノミックスの実験研究によって詳しく調べられてきている。Hsu et al. (2005), Huettel et al. (2006), Bach et al. (2009) などの研究は、リスク知覚に対して曖昧性知覚が、前頭回内側部をはじめとしていくつかの脳部位をさらに活性化することを明らかにしている。

ところでこのような研究にもまだ残されている疑問がいくつかある。その1つは、リスクや曖昧性への知覚と言っても、それらはいかなる事象に関するリスクや曖昧性かによって、異なった知覚的特性を示すことはないのだろうか、と言う疑問である。従来のニューロエコノミックスの実験対象としては、もっぱら金銭的利得・損失の問題が、ギャンブル課題として取り上げられてきた。したがって現在のところ、ニューロエコノミックスの領域内では、この疑問に答えることはできない。しかしこの疑問の中に、われわれの生命を支えるための食に関するリスクの問題を含めるとしたら、それは決して軽視し得ない内容

1) リスクに関して、それを「知覚」の問題として研究することの方法論的重要性については、Loewenstein et al. (2001), Slovic et al. (2004) などを参照せよ。また曖昧性に関する知覚問題に関する方法論的問題については、Nakagome et al. (2011) なども参照せよ。

のものとなる。はたして、食品に対するリスク知覚や曖昧性知覚に関しても、人は金銭的リスクや曖昧性と同じような認知的特性を示すのであろうか。

リスク心理学の分野には、すでに多くの研究成果がある。食のリスク知覚は、金銭的なリスク知覚と比べて、異なった特徴を有しているとされている。その特徴の1つは、食のリスク知覚が、国や地域や文化圏のあいだで大きく異なっているということである。たとえば Fischler (2008) は、遺伝子組み換え食品に関するリスク知覚が、各国の国民間で異なっていることを示している。それによると、遺伝子組み換え食品に対して大いに反対という人の割合は、アメリカとイギリスではそれぞれ 22.2%, 31.4% と比較的低いですが、フランス、イタリア、スイスなどヨーロッパ大陸諸国では高く、それぞれ 66.1%, 65.3%, 68.6% となっている。日本でも、遺伝子組み換え食品に関するリスク知覚がきわめて高いことがよく知られている。なぜ日本やヨーロッパの大陸諸国などの人々は、こうした食品に関して強いリスク知覚を有しているのに、アメリカやイギリスなどの人々は、きわめて楽観的な見方を示すのであろうか。この食のリスク知覚の地域的および文化的な大きな相違は、金銭の利得・損失に関するリスク知覚では見られない特徴である。ではなぜこうした大きな相違が生じるのか。理由として考えられるのは、基本的には食の確保は、われわれの生命の維持という普遍的な目的のために行われているとは言うものの、その目的達成のために実施される具体的手段と方法は、その地域の特性や文化に適応的な形で行われているからであると考えられる。したがって、食の安全性や危険性に関する認知特性も、このような地域・文化に特有な食の確保・摂取方法の体系化のなかで生じてくるものであると考えられる。

しかし本論文では、以上述べたようなリスク心理学の分野の研究を超えて、さらに新しい考察を進めたいと考えている。ここでは急速に進展するグローバル化の問題を考えてみる。地域性や文化特性に根ざして食に関するリスク知覚が大きく異なっていると言っても、それらは個々独立に存立しているわけではない。人々は、自分たちの食に関するリスク知覚の特性とは異なるリスク知覚が、さまざまな他の地域や文化の中に存在することを、このグローバル化し相